

高校で出会った 「円盤投げ」

田川高陸上部は、現在部員34人で日々練習に励んでいる。山本兄弟は中学生時代も陸上部に所属しており、当時は短距離と砲丸投げの種目で活躍していた。高校に進学し、陸上部に入部後、中学時代の陸上部顧問の勧めもあり、円盤投げという種目に初めて挑戦した。当初「投げる種目」という意味

では経験があり、自信のあった2人だったが、いざ向き合くと、投げ方の違いなど、その難しさにぶつかったという。

しかしながら物事を途中で諦めることが嫌いな2人は、各大会やインターネットなどで円盤投げのフォームの研究を行った。また、練習メニューも独自に作成し、土日にも練習に励んだ。これらの努力もあって、高校から始めたとは思えない成績を収め、各大会で優勝するなど頭角を現した。



▲一人ひとりの特質を大切に、指導にあたっている小野山教諭

お互いを高め合う

陸上円盤投げ 山本兄弟

田川高等学校陸上競技部の3年山本紘也さん、喬大さんの17歳双子の兄弟が今、高校陸上界を熱くさせている。

2人は、6月16日に福岡市で行われた福岡、佐賀、大分、長崎4県の代表を決める北部九州大会で見事2、3位に入賞。兄弟揃ってインターハイ出場の切符を獲得した。

田川高陸上部は、授業が終わると顧問の小野山大寿教諭の指導の下、ランニングや柔軟などでけがをしないための体作りを行い、基礎力をつけてから、各種目における実践的な練習を約2時間行う。小野山教諭は「まずは安全第

一。生徒がけがをしないように気を配ります。そして部員一人ひとりの特質を活かすメニューを考え、指導しています」と話す。小野山教諭の熱心な指導を受け日々練習に励む2人。「特に合宿などとはとてもハードです」と口を揃える2

人だが、紘也さんは「小さな目標の積み重ねで目標をクリアしたとき」、喬大さんは「スランプを抜けたとき」がうれしいと、厳しい練習を乗り越えた先にある楽しさを話す。

インターハイ出場

インターハイでの目標は「予選通過し、8位以内に入賞するこ

と」。この強い気持ちを抱き8月3日に大分県大分市で開催された試合に臨んだ。

その結果、紘也さんは最後まで諦めず攻める姿勢を見せたものの42m21cmという記録で予選敗退。また、喬大さんも持ち前の負けん気の強さで試合に臨んだものの本来の力を発揮できず34m94cmという結果に終わり、予選通過とはならなかった。

インターハイに出場して、紘也さんは「緊張して思い通りの投てきができなかった。この悔しさをバネにもっと円盤投げに取り組みたいと思った」、喬大さんは「初めてのインターハイで緊張した。全国の選手のレベルの高さを実感した」と大会を振り返る。そんな2人を見守った小野山教諭は「紘也はスランプがあったものの昨年のインターハイ出場という経験もあり、自身を掻き立て、うまくまとめることができたと思う。喬大は良いコンディションで臨んだが、初のインターハイというプレッシャーもあり、力が入り、普段の投てきができなかったのが残念」と

さらなる目標に向かつて躍進

山本兄弟は来春同校を卒業し、3年間共に練習した仲間と離れ大学へ進学する予定だ。大学でも円盤投げを続けるという紘也さんと新たにハンマー投げに挑戦したいという喬大さん。これからも、お互いに刺激し合い、良き仲間、良きライバルとしてお互いの力を高め合っていくことだろう。これらの2人の活躍が楽しみだ。



▲念入りにフォームを確認する紘也さん(上)と喬大さん(下)

